
消えたクリスマスプレゼント

イヌズキノネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えたクリスマスプレゼント

【Nコード】

N0838D

【作者名】

イヌズキノネコ

【あらすじ】

平凡な家庭に生まれ育った矢代和樹^{やしろかずき}。そんな彼の平凡なクリスマスに起こった出来事。彼のプレゼントは一体どこに？ - 短編小説で2部完結予定です -

前編（前書き）

現在書いている小説がシリアスなもので、少しコメディーを書きたくなりました。よろしければ、最後までご覧ください。

前編

キーン、コーン、カーン、コーン

キーン、コーン、カーン、コーン

今日は12月24日。

世間では恋人たちが温もりを求めて寄り添い合い愛を深める、年に一度の特別な日。

イエスキリスト誕生の前夜祭。

今宵、世界が幸せに包まれる・・・

そんな日に、俺は学校で補習を受けさせられている。

なんで？なんて聞かないでくれ。理由は聞くまでもないだろ？

今学期のテストが目を瞑りたくなるほど・・・最悪だったから。

どのくらい悪かったのかだって？

わかった、見せてやるよ。

<成績表>

1年4組36番

矢代

和樹（やしろ

かずき）

〔期末テスト〕

国語：74点

数学：56点

社会：70点

理科：55点

ここまでは問題ない。そう、この先に今の状況を作り出した原因があるのだ。

英語：？点

誤魔化して済まない。正直に言おう。

英語：1点

・・・。

・・・。

どうだ驚いたか？1点だぞ。

勘で解いても10点くらいは当たるはずなのに1点なんだぞ。

名前書き忘れなんかじゃない。ちゃんと解いて1点なんだよ！

しかも、1問2点・3点の問題しかないのに・・・

どこからか、1点が舞い降りてきている。

神の慈悲？先生の慈悲？

どうせならクリスマススイブに休日を！

と、まあこんなこと言っても仕方ない。

すべての責任は僕にあるのだから。

教壇に立つ先生に目を向けて、一応まじめに受ける姿勢をとる。

先生・・・クリスマススイブの出勤、御苦労さま。

お昼を過ぎると気温も上がり、勉強にもようやく精が出てくる。
朝からミツチリ絞られていても、あと2時間・・・。
終わりが見えてくると、疲れなんて吹き飛んでいた。

「やるぞぉー！！」

声には出せないので、教科書に書きこんだ。

教科書の中で、ジョディー先生がMr. スミスに……

おお、なんて目に毒な教材だろう……。

…

チク・・チク・・チク・・

チク・・チク・・チク（タク）……

チク（るな）……チク（るよ）……

チク（なんで）……チク（は正直ものだから）……

チク（のバカ野郎）……

キーン、コーン、カーン、コーン……

脳トレは、3時で終了を迎えた。

学生としては超充実した一日だ。これだけ頭を使えば、先生も満足だろうよ！

「よし。矢代、答案を出せ」

答案？

そんなものどこに……

「どうした、矢代」

机の上に真っ白の紙が一枚。

別のことを考えていたせいで、テスト中であることを忘れていた。

「先生・・・ワン、モア、チャンス」

結局学校を出たのは、4時前3分だった。

通学路を家に向かって歩いて行く。

制服姿は俺一人くらいか……。トボトボ歩く後姿は、寂しさの極致だろうな。

哀愁漂う風景を、一人の美男子がさまよい歩いている（笑）。

「かずきー！」

バカでかい声が後ろから聞こえてくる。

“私の後ろに立つのは何奴じゃ！”サムライの如く機敏に振り返った。

「かずきー、捕囚お疲れさま！」

バカ！近所で“捕囚”なんて言葉使うな。

捕囚？

補習？

別にどっちでもいいや！とにかく“ほしゅう”って言うな。
俺は駆け寄ってくる幼馴染に目で合図をした。

キラン！

目と目が触れ合う。その瞬間、赤外線通信が開始された。

『ごめん、叫ぶつもりじゃなかったの。ただ和樹が帰ってくるのが
見えたら、声をかけずにいられなくて』

（なんだあゝ。そういう事だったのか。待たせて、すまない）

『ううん、もういいの。帰って来てさえくれれば、それだけで・・・』

』

（キヨミ！）

『カズキ』

「昨日貸した2000円返せー！」

妄想通信はキヨミの叫び声によって、余儀なく中断させられた。

目の前から走ってくる女。

俺の幼馴染で、名前を春木 代美（はるき よみ）という。

春の木（さくら）に代わるような美しい女性になれ、という願いを
込めてつけられた名前らしい。

だが、ヨミとは何とも呼びづらい名前。なので、一文字足してキヨ
ミってみんな呼んでいる。

春木のおじさん、勝手に名前を変えてごめんよ。最初に呼び出したの、俺なんだ。

だからごめんなさい、春おじさん。

懺悔している間にキヨミが目の前まで来ていた。

「昨日貸した2000円？ほら、早く返して」

「わかった、わかった。そう急かすなよ」

そう言っても、落ち着きを見せないキヨミ。

財布から千円札2枚を出すと、ハエを捕らえるカメレオンのようにキヨミの右手がお札をかつさらっていった。

「よかったあゝ」

「キヨミ、いったい何をそんなに急いでいるんだ？お金が必要なことでもあるのか？」

「だって2000円無いと、サンタさんからプレゼント貰えないんだもん！」

What? おっと、つつい勉強の成果が……。

「何を言ってるんだ？」

「お父さんがね、『今日サンタさんから電話があつてな、トナカイが風邪をひいて倒れているらしい。うちにプレゼントを運んでくるのはどうやら……。あ、心配するな。大丈夫。私が直接受け取り

に行くことにしたから。だが、サンタさんの所に行くためのお金がなくてな……」って言ったの。だから2000円必要なの」

何々……サンタ（三郎おじさん）から電話でトナカイ（歯科医の長谷川さん）が来れないから、代わりに来ないか（麻雀に）？
で、2000円を持ったおじさんはプレゼントを貰うお金を稼ぎに
今から……

「あゝ急がないと。プレゼント届かないよ。カズキ、それじゃあね」
走り去るキヨミを見て、俺はつぶやいた。

キヨミ、おまえのプレゼント……
今年は無いかも知れないぞ。

「ただいま」

玄関を開けて、帰宅の第一声を放った。

「……」

まあ、誰も『おかえり』なんて言ってくれないよな。
とりあえず荷物を置きに2階へ上がる。

ガチャ

ドアの向こう、そこには真四角な空間があった。
フローリングの床には青い絨毯が敷いてある。

部屋の右奥に机があり、その反対サイドにベッドが置かれている。
ベッドの横には押入れがあつて、色々なものがゴチャ混ぜになつて
収められている。

部屋全体はそんなに広くないが、狭くもない。

俺は机にカバンを置き、ベッドに腰をおろした。

「クリスマスイブねえ・・・」

制服を脱ぎながら、いつもと変わらない1日を退屈だとしみじみ感じていた。

・・・。

・・・。

「か・・・く・・・ん・・・きて・・・」

？

「かず・・・ん・・・お・・・て・・・ご飯・・・」

“ご飯”という単語。

俺の胃袋が急にうずき出す。

「かずくん、起きて御飯よ」

「はぁい」

目を覚ました時、部屋はいつの間にか真っ暗になっていた。
午後7時半、ご飯の時間だ。

俺は一度背伸びをして、ベッドから腰を上げた。

一階の居間には家族全員が揃っていた。

「いただきます」

一同の声が重なり合い、食への感謝を表す。今日ばかりはみんな真剣に言っているようだ。

それもそのはず、今日の食卓は実に豪華なんだから。

甘ダレで表面を焼いた七面鳥に、3種類のパスタ、ローストビーフ。
ポタージュスープに、魚のムニエル、ライス大盛り付き。

一瞬ここが“最後の晚餐”の舞台に見えた。

コタツ、畳、純和風テイストがヨーロッパの・・・やっぱり目の錯覚でした。

「アニキ、食べないの？」

生意気そうな顔をした小娘が話しかけてくる。

「いや、食べるよ。ちょっとボーとしてた」

「勉強し過ぎて、頭がショートしてんじゃないの？」

「バーカ。今日一日でぶっ壊れるはずないだろうが」

「それもそっか。アニキの場合、脳そのものがないんだったね」

「勝手に人を改造するな。ちゃんと脳くらい入っているわ！」

「ふたりとも！食事中なんだから、もっと静かにしなさい」

「はあゝい」

母の一喝で、俺らを静かな食卓へと戻っていった。

食事後、居間ではバラエティー番組が流されていた。

お笑い芸人たちがクリスマス返上で、国民に笑いをプレゼントしている。

もちろん、ココにも笑いがプレゼントされていた。

コタツに入って、テレビに釘付けの父・母・妹・俺。

時刻は9時に差し掛かっていた。

「そしたら、デザートにしましょうか」

番組終了と同時に、母の声が聞こえてきた。

妹は“待ってました”とばかりに嬉しそうな表情を見せる。

俺も甘いものは好きだから、心は躍っていた。表情には出してな

いけど。

キッチンの方から物音がし、その後でケーキを持った母が現れた。

ケーキ上では白い生クリームが雪を演出し、サンタとトナカイが愛らしい表情を浮かべている。

小さなリースがアクセントに添えられていて、クリスマスらしい仕様だ。

コタツの上にケーキが置かれると、一同テレビからケーキへと視点を切り替えた。

ケーキの上にろうそくを並べ、火を灯す。

すべての電気を消すと、ケーキに並ぶろうそくの炎がクリスマスの一夜を演出した。

「きーいよしーこの夜ー」

クリスマスムードを高める歌が部屋全体を流れていく。ろうそくの明かりが風に揺られながら辺りを照らす。

矢代家独自のクリスマス模様。そこには誰の関与もない。

歌が終わると、妹がろうそくを消してクリスマスムードを終わらせた。

ケーキを4等分して皿に盛り、フォークで口に運んでいく。

牛乳と合わせると、甘さが加減されて丁度いい味になる。

ケーキを食べ終えたときには、お腹はもう一杯いっぱいになっていた。

「そしたら」

父が立ち上がりながら、言葉を発する。

いよいよだ。

子供のころから常に楽しみにしている瞬間。そう、プレゼントをもらう瞬間がきたのだ。

「まずは涼香（すずか）から」

父は隠していたプレゼントを妹に手渡した。

「ありがとう！開けてもいい？」

「ああ、どうぞ」

涼香は包装紙を破り、中に隠れたモノを確認した。

「ああー、これ……。お父さん、ありがとう」

涼香の手に乗っている品物、それはデジタルカメラだった。

「……って、おい！」

俺の中学時代と大きく差がないか。

「涼香は勉強頑張ってるみたいだから、「こ褒美さ」

父は満面の笑みで涼香を見ていた。

「さて、次は」

いよいよ俺の番だ。

涼香にあんな良いものをプレゼントしていると・・・

「あ、お父さん。和樹の分は・・・」

「そうだったな。すまないが、和樹。お前のプレゼントはもうココにはないんだ」

なに！？

ココにないってどういうことだ。

「実はね、和樹のプレゼントはある場所に隠してあるの。涼香に見られるとマズイから。でも大丈夫よ。和樹がいつも目にする場所に置いているから」

母が言葉をつけたして説明した。

涼香に見られるとマズイ？

ちよつと待てよ。涼香がデジカメだから・・・

おいおい、そいつはいつたいたいだけ高価なものなんだよ！
高校に進学した途端、急激にレベルアップするのか？

俺は期待で胸がいっぱいになった。

お風呂に入り、時刻はもうすぐ12時。

就寝時間が迫ってきている。

俺のプレゼントはまだ発見されていない。

“いつも目にする場所” って言っていたけど、それって何所なんだよ。

未だ見ぬプレゼントに、俺は不安と期待を膨らませていた。

楽しみは後になればなるほど、膨れ上がっていくモノ。

俺はベッドに入っとなおプレゼントの事で頭がいっぱいだった。

去年が受験のための問題集、その前がゲームソフト、さらにその前は・・・何だっけ？

まあ、そんなことはどうでもいい。

今回は以前のモノと格が違うわけだから。

もしかしてロレックスとか？

七夕の短冊にそんなお願いをしたような気がする。

いや、それよりもっと高価なものだったりして・・・。

ベッドで夢を描きながら、俺は眠りに入ってしまった。

前編（後書き）

彼のプレゼントとは？皆さんも色々想像しながら、次回を楽しみにしてください。

後編

ドタドタドタ・・・

ガサガサガサ・・・

早朝、家の中を響き渡る物音。
発生源は俺の部屋。
現在プレゼントの搜索中。

ドタドタドタ・・・

ガサガサガサ・・・

「カズキ！朝からうるさいわよ。何してるの！」

母の怒りが、家の中に響き渡った。

「プレゼント探してるんだよ！」

母の面倒な行為によって生まれた怒りが呼応した。

「こんな朝っぱらから探さなくてもいいでしょ。それよりご飯できてるから、食べに来なさい」

「ああ。すぐ行く」

1階の居間。焼き魚と味噌汁、ご飯が並んだ我が家の食卓。
昨日のクリスマスを微塵も感じさせない、いつもの姿である。

「いただきます」

嬉しそうに涼香が言う。

その姿が今の俺には腹立たしく思えた。

昨日のプレゼントでウキウキしているのはわかるが、こっちも事も考える！

俺はまだプレゼントとご対面できずに、イライラしてきてるんだぞ！

ぶすつとした表情で俺は魚を頬張った。

食後お茶をすすっていると、涼香が俺に話しかけてきた。

「アニキ、今日どこか行かない？」

「ん？何だよ」

「昨日もらったプレゼントを使いたいの？」

おれのイライラに油を注ぎやがった。

「別に俺じゃないくてもいいだろ？友達でも誘えよ」

「えゝ！？だって友達と撮っても面白くないもん。アニキならどんな姿でも絵になるし」

「そりゃゝモデル並みのスタイルだからな」

「ううん、違うよ」

キッパリ否定。

「アニキを撮ればどの絵も面白おかしくなるから、ネタになるの。みんなに見せたら話題なくなる心配ないしね」

油1トン追加しまゝす。

「ふざけるな！そんな事なら尚更行かん。もともと行くつもりないし」

「行こうよ。絶対楽しいから」

おまえがな。

「今日俺には予定があるの。先約が入っているから涼香とどこか行くのは無理」

というか、嫌！

「うゝむ。アニキのケチ」

というか、バカ、アホ、マヌケ、ブサイク。お前の母ちゃん、でべそ。

自分の母親をけなすな。

むむむ、まだお尻青いくせに！

・・・。

・・・。

・・・。

言葉にならない暴力は止めましょう。結構傷つくから・・・

涼香との口論を終えた俺は、自分の部屋に戻っていた。

「よし！宝さがし、再開！！」

気合いを入れなおして、搜索を開始した。

『か・ず・き・く〜ん』

ん？

今俺を呼ぶ声が聞こえたような・・・

『か・ず・き・く〜ん』

聞こえる、俺を呼ぶ声が。

プレゼントが俺を呼んでいる。

「待ってる！今見つけてやるから」

俺は声が聞こえてくる方へと向かった。

向かった先は、部屋の中にある唯一の窓。声はこの向こう側から聞こえてくる。

期待に膨らむ思いを押さえて、俺は窓を開けた。

ガラガラガラ・・・

窓の向こうに現れたのは、迷彩柄のクマ？

あれ？俺のほしいプレゼントじゃないような・・・

「か・ず・き・く〜ん」

迷彩柄のクマが喋りかけてくる。

おお・・・なんと恐ろしい光景だ。

「おはよう！かずき君」

「おはよう・・・」

「ねえ、私かわいいでしょ？」

「はぁ・・・かわいいですね」

「ウフ。かずき君ならそう思ってくれと信じてた」

このクマ、今ウフっとか抜かしたぞ。

口調も女の子だし。ちよっとキモイ・・・。

「かずき君さあ」

「その気持ち悪いしゃべり方やめろ！キヨミ」

「あら、バレた？」

クマの横からキヨミが顔を出した。

「ばれるも何も、始めからわかってたし」

「なんだ、つまらないなあ」

キヨミは頬を膨らまして拗ねたような顔をした。

俺の家とキヨミの家は横に並んで建っていて、俺の部屋からキヨミの部屋が見えるような造りになっている。
女の子の部屋が見える、普通の男ならうれしく思える環境だろう。

しかし、相手がキヨミとなれば話は別である。

この窓はいつしか俺とキヨミの電話代わりとなっていて、重要な事からくだらない事までここを通して話が行われる。ほとんどくだらない話だが・・・。

よって、俺のプライバシーはご近所さんに筒抜け。キヨミの爆弾発言により、俺の素性はこの地域に住む人はもちろん、偶然通った人にまでバレている。

「ねえ、カズキ」

「なんだ？」

「これ・・・良くない？」

迷彩柄のクマの縫いぐるみを指して、キヨミが訊ねてくる。

「ああ、いいと思う」

キヨミにしては珍しく女の子らしいアイテムだ。

「だよな。やっぱりカズキは私のよき理解者だ」

「ん？別におかしいところなんて、ないよな・・・。何かそいつにおかしなところでもあるのか？」

「ううん。それがね、私がこのクマかわいいって言ったら、お父さんとお母さんがおかしいって言うの」

「普通にかわいいと思うが・・・」

「だよな。だって迷彩柄だよ！自然の中で迷彩のクマがいたら絶対最強だと思うよね。そんな最強のクマちゃんを可愛いと思わないなんておかしいと思わない？」

さすがに現実を交えられると可愛いとは思えん。
最強の捕食動物となつたクマなら尚更・・・。

「カズキは私と同じだね」

ごめんなさい。どうやら間違いました。

「このクマの何が良いつて・・・」

俺の思いとは裏腹に、その後迷彩クマの話は続いた。

「カズキはプレゼント何貰ったの？」

クマの話が終わり、痛い所を突いてくるキヨミ。

「実はまだ貰ってないんだよ。で、今探しているところ」

「そうなんだあゝ。それならさ、私が探すの協力してあげようか？」

「別にいいよ。たぶんすぐに見つかるだろうし」

「私に任せなさいって。今すぐそっちに行くね」

俺の言葉を見殺して、キヨミはこっちにやって来ようとしている。
窓枠に足を置いて、こっちに飛び込んでくるつもりらしい。

「行くよ！」

キヨミが掛け声を上げる。

・・・。

って、ちょっと待った！

「待て、キヨミ！」

「ん？」

「おまえそこからここに来るつもりか」

「そうだけど」

「アホだろ！お前の部屋から俺の部屋まで何メートルあると思ってるんだ！！」

「へえ？」

「へえ？じゃねえーよ。3メートル以上ある所を飛べるわけないだろっ」

「私魔法使いだから・・・てへ」

「・・・」

キヨミのバカさ加減に呆れたものの、何とか飛んでくることだけは阻止出来た。

残念そうな顔をするキヨミを見て、飛ばせておけばよかったかもなんて思った事は内緒だが。

結局搜索の協力は断れず、キヨミが家へ来る事になった。

最強の助っ人を連れてくるとか言っていたけど、誰を連れてくるつもりだよ。

「カズキ！ちわっす」

ドアを勢いよく開けて、キヨミが部屋へ飛び込んできた。

「ちわっす、キヨミ」

「プレゼント搜索隊、只今参上しました」

「ご苦労さん。で、助っ人って誰連れてきたんだ」

「よっ！アニキ」

わが妹が仲間に加わった。

最強の助っ人って・・・コイツかあ。

「なんで涼香が最強の助っ人なんだよ」

俺は露骨に嫌な顔をした。

「違うよ。ここに来る道中で、偶然捕まえたの」

「そうですか・・・」

「で、最強の助っ人はこっち」

キヨミの背中から2つの物体が姿を現す。

・・・。

それ・・・さっきのクマでは？

「この子たちが居れば、見つからないものはないよ」

そっとうキヨミの左肩には、もう一人の助っ人が乗っかっている。

迷彩柄の・・・何？

「あ、自己紹介がまだだったね。この子がティディーベアのファルコン！で、こっちの子がピンクパンサーのランちゃん！」

おお、ピンクパンサー殿でしたか・・・
もはやピンクじゃないけれど。

「で、そいつらが俺のプレゼントを見つけてくれると？」

「うん」

どうやら搜索は難航しそうです。

3人と2匹？は俺の部屋へ何とか入った。

そんなに広くない部屋に、この人数は正直きつい。

動きづらくなった現状に、一人で探し物をした方が良かったとしみじみ思った。

「カズキ」

「なんだ？キヨミ」

「プレゼントってどんな物？」

「見てないからわからん」

「匂いは？」

「そんなことはわからん。ただ匂いはしないと思う」

「それじゃあ・・・この子たちの役目は無いんだね」

残念ながら、もともと役には立たないぞ。

キヨミ、もっと現実を見る。

残念そうなキヨミを他所に、涼香は黙々と探し物をしていた。

「あっ！」

突然、涼香が声を上げる。

「どうした！何か見つかったか？」

「これ・・・」

俺とキヨミは涼香の手にのっている物体を見つめた。

・・・。

・・・。

「うわあああああ」

「キヤーー」

俺とキヨミの叫びが部屋中に広がった。

涼香の手の上にいるもの。

黒い胴体に無数の毛が生えている物体。

6本の足、体に描かれた黄色の紋章。

間違いない！

テレビでお馴染みの奴だ。

「タ、タ、タランチュラ」

なんで俺の部屋にそんな危険な生き物があるんだよ！

そんなモノ飼った覚えはないぞ！

「ここにいたんだね」

涼しい顔で涼香はやつを見つめている。

「涼香！早く捨てる！」

「大丈夫。だってこいつ生きてないもん」

「へえ？」

「すっかり忘れてたけど、こんな所にいたんだ。アニキを驚かせようと思って仕掛けていた事忘れてたよ」

「涼香？おまえ・・・」

ようやく状況が整理できてきたぜ。

「何しとんじゃー！！」「カワイイーーーー！！！！！！」

俺の怒りはキヨミの声にかき消された。

「これ可愛いね」

「やっぱり。キヨミさん、こっいつの好きだもんね」

女の子がエライ発言をしていますぞ。

「アニキ、これ可愛いよね？」

「・・・」

どうやらこの空気にのれていないのは俺だけのようです。

キヨミと涼香がタランチュラについて熱く語り合っている間、俺は一人搜索を再開した。

机と壁の間、ベッドの下、絨毯の下。

すべてにおいて涼香の仕掛けが見つかった。

俺の部屋はいつの間にかデンジャラスなサファリパークへと変貌していたようだ。

もしも知らずに大掃除を迎えていたら、

・・・

恐ろしくて想像したくない。

たぶんショックで死んでいただろう。

『妹の仕掛けに兄死にかけ』

今年最後のニュースをこんな記事で飾りたくはないな。

しばらく一人で作業していると、途中でキヨミと涼香も作業を加わった。

10分間もよく語り合えたものだ。

部屋の大半は調べたが、依然プレゼントは発見できず。もしかしてこの部屋にないのか？

不安を抱えながら、残った押入れの搜索に踏み入った。

「やっぱり隠すとなると、ここしかないよね」

「そうだよな。でも、ここアニキがよく目にする場所なのかな？」

同感だ、妹よ。押入れなんて頻繁に開ける場所じゃない。

「まあ、探してみればわかるよ」

キヨミが押入れの扉を開いた。

ガサ、ゴソ、ガソ、ゴソ、・・・

キヨミと涼香が押入れの隅々を探索する。

二人分の幅しかない押入れの入口。

俺は二人の探索風景を後ろで見守っている。

「意外とキレイにしてるんだね」

「まあな」

「よし、今度はココにドッキリを・・・」

「変な事を考えるな！」

ふざけ合いながらも、調査は真剣に行われた。

「やっぱりないね・・・」

「ホント」

結局押入れからも見つからなかった。

それじゃあ、俺のプレゼントはどこに？

次の探索ポイントを考えている俺の前で、キヨミが押入れの扉を閉めようとした。
その時だった。

「あれ？押入れの天井に・・・」

「ああ。あれは屋根裏部屋へ繋がる扉だよ」

涼香が答える。

「あそこ・・・怪しいね！」

キヨミの目が光る。

屋根裏部屋。

普段は使われないため、いつしか家族みんなの記憶から除外された場所だ。

・・・。

つて、ちよつと待った。

心の声を無視してキヨミが扉を開ける。

そこは、

俺の・・・俺の・・・

シークレットプレイスじゃねえかよ！

<シークレットプレイス>

俺の大切なシークレットアイテムを保管している場所である。
シークレットアイテム、それは・・・男の宝である。

「ちょっと待った！」

俺は大きな声でキヨミを止めようとした。

しかし、キヨミはそれを無視して屋根裏部屋へ顔を突っ込んでしまった。

終わった・・・。

俺のテンションは最低のラインまで落ちて行った。

「あつ！あつたよ」

「え？」

キヨミが屋根裏部屋から綺麗に包装された物体を取り出してきた。

「キヨミさん、すごい」

涼香がキヨミを褒めたたえる。

キヨミの手には確かにプレゼントらしき物があった。

でもどうしてココに？

『和樹がいつも目にする場所に置いているから』

母の言葉が頭をよぎる。

いつも目にする場所〃シークレットプレイス

なるほど！敵ながらあつぱれ。

って、もうシークレットじゃなくなってるし。

一体いつから知っていたんだマイ・マザーは・・・。

プレゼントが見つかって嬉しい反面、母への恐ろしさに震えた。

「ねえ、カズキ。プレゼント開けてみてよ！」

「そうだよ。アニキがどんな物願ったのか気になるし」

「わかった、わかった」

急かす二人を前にして、俺は包装を取り外していく。

「いくぞ！」

最後の包装を破り捨てて、プレゼントがその姿を現した。

「・・・」

「・・・」

「・・・はあ？」

姿を現したプレゼント。それは予想に反するモノだった。

サンタがくれたプレゼント。

それは、シークレットアイテム×3。

どういう事だ？

高校生になってレベルアップしたはずのプレゼントが、なんでこんなモノなんだ。

ロレックスは？高級なプレゼントは？

変な方向にレベルアップしてしまったアイテムに、俺たちはただ黙っているしかなかった。

「カズキ・・・」

「アニキ・・・」

冷たい視線が俺に突き刺さる。

俺だってこんなモノ望んでないぞ！

反論したいが、そんな状況ではない。

「最低」

キヨミの一言に、部屋の気温が一気に下げられた。

ドタドタドタ・・・

「母さん！」

俺はプレゼントを抱えて、居間で寝ころんでいる母を怒鳴りつけた。

「なんだよ、これ！！」

プレゼントを母に突き付ける。

「あ、プレゼント見つけたのね」

母は冷静に言葉を返してきた。

「見つけたのね、じゃねーだろう。何だよ、このプレゼントは！」

「あら？カズ君の欲しかったものじゃなかった？」

「なんで俺が、こんなモノをクリスマスプレゼントとして欲しがるんだよ！」

「だって先月燃やしちゃった時、すごく落ち込んでたじゃない。俺の宝が、青春が・・・なんて言って」

うん。確かに言いました。

「だからって、こんなモノを欲しがるわけないだろ！」

「そんな大声あげないでよ！もうプレゼントしてしまったんだから、仕方ないでしょ」

俺は泣きそうになりながらも、母をじっと睨みつけていた。

「それいいじゃない。クリスマスのプレゼントとしては最適よ」

「なんでだよ」

「聖なるプレゼントが性なるプレゼントなんて」

下ネタでキレイなオチをつけようとするな！クソババア！！

俺は母が枕に使っていた座布団を、引きぬいてやった。

「はあ」

ナーバスな気持ちを隠しきれない俺はトボトボと階段を上がっていた。

期待を込め過ぎた俺が悪いのだろうか・・・。

昨日夢の中で膨れ上がったプレゼントは、跡形もなく消え去った。手には現実のプレゼントが抱えられている。

これでどうしろって言うんだよ！

俺はプレゼントに目を向けた。

聖なるプレゼント・・・性なるプレゼント・・・。
どんどん気持ちが落ち込んでいく。

俺は頭を振って、気持ちを前向きに切り替えた。

こいつらに罪はない。そうだな？

俺が夢を見たのが悪いんだ。

こいつらだって俺を落ち込ませたくて存在しているわけではないんだから。

落ち込んでいた気持ちが、少しずつ上がっていく。

俺が悪かった。

心の中でプレゼントに謝った。

聖なるプレゼントは、精が出る（やる気を出す）プレゼントへと変わっていった。

俺の顔にも笑顔が戻ってくる。

平凡なクリスマスは、最後に笑顔をプレゼントしてくれた。

パシャ

階段の上から光が飛んでくる。

そこにはデジカメをもった涼香がいた。

「へ・ん・た・い」

嬉しそうに涼香がつぶやく。

・・・。

やっぱり最低のプレゼントだ、バカヤロー!!

後日。

エロ本を持ってニヤつく俺の写真が近所にふりまかれたのは言ってもない。

消えたクリスマスプレゼント（完）

後編（後書き）

はじめまして、イヌズキノネコです。

本作品はいかがでしたでしょうか？

初めてコメディーを書きましたが、最後のオチがあんなですみません。

今後コメディーも書いていこうかと検討している中で生まれた作品なので、もし良ければ評価までして頂けると幸いです。

最後に読んでくださった皆さんへ

『良いクリスマスを！！』

イヌズキノネコでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0838d/>

消えたクリスマスプレゼント

2010年10月15日21時46分発行